

〈無〉理解の系譜学へ向けての思索的試み

— マイスター・エックハルトにおける〈無〉を巡る問題脈絡からの、ハイデガーと西田の下での〈無の思索〉への照射 —

長町 裕司（上智大学）

哲学的思惟の歴史を通じて生成した〈無の理解〉を改めて診断してみるために、〈無〉が問われ考究される問題構制の諸次元とその固有な問題脈絡（コンテクスト）を開明してゆくことに着手したい。此の度の『西田哲学会』大会にて提題をさせていただく機縁に際して、以下の手順を踏んで〈無の問題脈絡〉に光を当てることを試み、この真に根元的なテーマに接近してゆく通路が開かれる上で僅かながらでも寄与できればと願う次第である。

1. 西洋の哲学思想史とキリスト教的精神史の伝統を背景としつつも極めて独創的な思考連関を創出したドイツ神秘思想の定礎にして主峰であるマイスター・エックハルト（ca. 1260 - 1328）に固有な〈神 - 存在論的（theo-ontologisch）〉な視座へと収斂してゆく「無の問題脈絡」を、三層からなる位相において捉え返す。
 - 1.1 存在論的否定態としての被造的存在者性における無の理解
 - 1.2 知性認識活動の無制約な開示態における無性
 - 1.3 「神と無」の相関が語れる特有なコンテクスト
これら三層において見出される「無理解のコンテクスト」は然るに、求心的に神にのみ固有な存在（Esse）の在り処としての隔絶的な「無に於ける一性（unitas）」からの形而上学的問題構制がエックハルトにおいて主導的であることを翻って明るみに出すことになる。
2. 〈存在の問いと思惟〉によって貫徹されるハイデガー（Martin Heidegger, 1889 - 1976）の思索の道において、〈無〉は存在の思惟との連関において『存在と時間』（1927）前後期より後期思索圏に至るまでその境域（Element）として属してくる。この思索の歩みをここでは四段階的に素描してみることにしたい。
 - 2.1 現存在の実存論的体制をその根底において規定している無性（Nichtigkeit）
 - 2.2 現存在の超越における世界の根源無（nihil originarium）
 - 2.3 存在のヴェール（Schleier）として、存在者の他者である無
 - 2.4 存在と無の本質共属性
3. 以上、その哲学思索における根本主題の開陳と独自の思惟の深化進展に〈無〉が問題として帰属する道を辿った西洋の二人の巨匠に対し、西田幾多郎（1870 - 1945）に於ける〈無の場所〉の開けとは、どのような事 - 態（Sach-verhalt）と思索の透徹から立ち現われてくるのだろうか？
 - 3.1 『善の研究』（1911）等の初期著作における〈無〉

- 3.2 『場所』論稿（1926）を基点としての「無の場所」
- 3.3 『無の自覚的限定』（1932）の時期における〈絶対無の自覚的限定〉
- 3.4 後期西田哲学と無

西田の〈無〉を巡っての思考の組織性へと焦点化しつつ上記のような思索の発展路線を見て取る試みは、むろん一定の先行投企以上のものではないし、この思索者の思索境涯に厳密かつ広汎に浸潤してゆく長い道を通りてこそ確固たる追思惟となり得るであろう。けれども、西田哲学における〈無〉の問題構制に通じてゆくためにも、エックハルトやハイデガーそれぞれの思考圏からの〈無理解〉の探索が同時に進められることによって、これら固有な思惟の遂行の対照から逆照射してくるものも言葉化できればと考える。